谷崎潤一郎「ドリス」試論

――イメージのなかの猫と「美容術」――

佐藤未央子

はじめに

古今東西、猫はあらゆる形で語られ・描かれてきた。かつては得体の知れぬ存在として怪異化される傾向にあったものの、時代とともに並々ならぬ猫への愛着、いわゆる「ネコロマンチシズム」（内田百閒[1]、一九六二年）が主題化される方向へ転換してきた。現代においては、感染症対策がもたらしたライフスタイルの変化により猫ブームが加速し、広く普及した各種ＳＮＳにおいてヴァーチャルな猫イメージが氾濫している。愛らしい猫の映像だけではなく、猫種やその性格、適切な飼養方法の情報をはじめ、食事や玩具、トイレなど関連商品の広告も飛び交い、〈正しさ〉をめぐって翻弄される――しかし当の猫本人はあずかり知らぬことだろう。

谷崎潤一郎「ドリス――ドリスと云ふ美女、並びに同じ名の波斯（ペルシャ）猫のこと」（『苦楽』一九二七年一―二、四月。以下「ドリス」と略記）は数多ある猫小説とは異質の、まさに現代的状況を予言するがごとき作品である。――アメリカの女優Ｐ嬢から譲り受けた純白のペルシャ猫ドリスを愛玩する語り手は、甘えるドリスに構うのも忘れて、映画雑誌 *Motion Picture Classic*（以下「クラシツク」と表記）に掲載された美容商品の広告に「夢中」になり「亜米利加の女と云ふものは、こんなにも技巧の限りを尽して美人になりたがつてゐるのだらうか」と思いを馳せ、次々と広告を翻訳していく。――連載第一・三回の誌面には実際に「クラシツク」の広告を切り貼りしたデザインが施された。翻訳引用による本文構成と誌面デザインはともにある種のコラージュとして成立しており[2]、なおかつ映画の企画記事や女性向け広告も掲載した『苦楽』のコンセプトに沿うものとなっている。挿画を担当した中川修造[3]は、「クラシツク」をド

リスが見上げる――尾を立て、好奇心を抱いているようである――構図を描いており【図Ⅰ】、作者・編集者・挿画家の協働性が高いテクストだといえる。連載第二回には、谷崎家の白ペルシャを写したであろう「波斯猫写生図」が寄せられた【図Ⅱ】。

広告の紹介に一章を割いたあと、愛猫ドリスが「普通世間にあるやうな凡庸な猫」ではなく、「完璧の美観」を持つことを確かめるために「家庭的愛玩猫」なるマニュアルを紐解く――そして「いよいよ本筋へ這入る」予定が「遅筆」ゆえ滞り、「挿絵も間に合はない」ため休載して書き貯めてから再開する（谷崎「「ドリス」休載について」一九二七年六月）と断りながらも叶わなかった。④

「猫と庄造と二人のをんな」（一九三六年）に比べて分析対象となることがはるかに少ない作品だが、本稿では谷崎の映画言説や身体美学と猫表象の系譜が交差するところに位置づけてみたい。

先に日本の猫文学史を大まかに振り返っておく。古典でいえば「源氏物語」や「枕草子」に宮中で囲われる特権的な猫の姿が描かれたものの、平安末期から中世・近世にかけて、仏教思想の浸透や中国説話の影響により猫の怪異性が前景化していく。⑤生成された〈化猫〉像は草双紙や歌舞伎の猫騒動ものなどで視覚化・劇化され、さらにイメージが増幅する。性質は利己的かつ反道徳的、時に人に媚びるものとされ、誘惑的な女性の換喩としても意味づけられてき

電子データのため不掲載

【図Ⅰ】

電子データのため不掲載

【図Ⅱ】

た。ある種のミソジニー的な視点は西洋の価値観においても同様の傾向があり、いずれの系譜をも引く谷崎も、悪気はなかろうが異性に対する嗜好を反映した枠組みで猫を捉えている。

江戸期には浮世絵等で滑稽さや親しみのある猫表象も生み出され、庶民に猫ブームが到来したとされるが、真辺将之『猫が歩いた近現代――化け猫が家族になるまで』（吉川弘文館、二〇二一年六月）はその事象を相対化しながら、猫が市民権を得ていく近代化の過程を具に検証している。一九〇〇年代に鼠を媒介とするペスト対策のため猫の飼育が公に奨励されて価値が高まり、高額売買される例もあった。稀少な猫への関心も高まり、雄の三毛猫やシャム猫も市場に出回ったという。殺鼠剤の普及により御役御免となるものの、人道主義的な観点から動物愛護の動きが活発化する。真辺によれば、明治末期から昭和初期は「猫をはじめとする動物のプレゼンスが高まり、また動物愛護の精神が次第に広まっていく」一方で「動物を家族のように愛することは奇異な目で見られたし、動物虐待や乱暴な扱いも厳然として根強く存在する時代であった」。一九〇二年に動物虐待防止会、〇八年に東京愛猫会が結成され、一三年にはニコニコ倶楽部主催で「にやあ〳〵展覧会」なるキャット・ショーが開催されるなどして愛猫家のコミュニティ形成がなされていくものの、現代と比べれば好事家の趣味と見做される傾向にあった。

文壇における好事家として挙げられるのは二葉亭四迷で、迷い込んできた猫を溺愛し、出産を補助したり里親探しをしたりするなど献身していたという。「吾輩は猫である」（一九〇五―〇六年）の夏目漱石は猫より犬を好んだが、「吾輩」のモデルが亡くなると墓を建て訃報を知らせ、二、三代目の猫も迎えた。泉鏡花は近世の怪猫譚を継承する作品を著した一方で、鼠捕りがうまく人間じみて健気な雌猫にまつわる思い出を伝えている（「駒の話」一九二四年）[6]。

作者当人が猫好きであるか否かにかかわらず、同時代の猫小説では猫への嗜虐的なまなざしもみられる。「吾輩」の猫は溺死し、芥川龍之介「お富の貞操」（一九二二年）の猫は銃口を向けられ（お富のお陰で事なきを得るが）、梶井基次郎「愛撫」（一九三〇年）では耳切りや爪切り願望に駆られる語り手が設定される。こういった構図は真辺の指摘する過渡期ならではだといえるが、谷崎の言説にはその傾向が一切見られず、むしろ猫が上位に置かれている。

また前掲の作品群で猫はドラマツルギーの一機能としての役割を与えられ、被毛や眼の色に関する描写はあれど猫種に対する積極的な拘りは見られない。「ドリス」の白ペルシャ趣味に谷崎の嗜好が反映されたことは自明だが、ハリウッド女優の飼猫としてふさわしく、画面映えする猫種としても必然性のある設定となっている。

スクリーンの猫たち

「P嬢は非常にドリスを可愛がつて、しばしば彼女の映画の中に使つた」と紹介される通り、語り手は映画を通してドリスと出会った。「お得意とする妖婦型の役」を演じるP嬢は「寝間着をまとつた、しどけない恰好」でドリスと戯れ、ドリスも喜んで纏わりつく。いかにも同時代ハリウッド的な描写で、同様のシーンを持つ映画の有無を調査するまでもないだろう。隔たれた世界に生きる女優（俳優）への欲望を持て余す主体を設定することが近代映画小説のセオリーだといえるが、ここでは猫もその視野に捉えられる。まなざしの対象が隔たりを超えてくるケースは皆無に等しいものの、猫ならば当人の意思を問わず移動可能であり、ドリスは日本郵船が運航する「これあ丸」に積まれて神戸まで運ばれてくる。語り手は「写真結婚をする日本の移民が、嫁御寮を迎ひに行くのと同じやうな気持ち」と、あまりに無邪気な感覚によってイメージを真と捉える。

さて「ドリス」でも描出されたように、猫は最初期から映画の〈登場人物〉となってきた。日常の姿を捉えたものや映像的なアクセントとして現れるのみならず、メインキャラクターとして演技をこなす〈役者猫〉まで登場した。[7] 本節では、谷崎と同時代にスクリーンを駆けた猫たちについてまとめておく。

映画誕生の少し前、運動の軌跡を記録するクロノフォトグラフィを開発したエティエンヌ＝ジュール・マレーは、高所から着地する猫の動きを撮影し、猫の身体機構に関する議論を呼び起こした。運動領域が広く素早い猫を被写体とするのは簡単ではなかっただろう。シネマトグラフ開発者のリュミエール兄弟は、長毛の黒猫がミルクを舐める姿（『猫の昼食』一八九五年）や姪が餌を与える様子（『少女と彼女の猫』一九〇〇年）等の食事に集中する光景を捉えた。一方エジソン社の『ボクシング・キャット』（一八九四年）はグローブを付けた猫にパンチさせ合う見せ物的要素が強いものだ。一九一〇年代にはマック・セネット喜劇に、専業役者としての猫、その名も〈ペッパー・ザ・キャット〉が登場してスターとなっていく。

谷崎は幻想短編「魔術師」（一九一七年）で、ポオ「黒猫」（一八四三年）の映画化がもたらすであろう、原作以上に鮮烈なインパクトに言及しているが、同時代だとオムニバス映画『怪談五種』（リヒャルト・オズワルド、一九一九年）の第三篇として映画化されたものが実際に確認できる。クライマックスで壁から現れる猫は、ビアズリーが描いた目の釣り上がった姿とは打って変わって愛らしく見え、カメラは皮肉にもそのままの姿を映し出してしまう。

谷崎が言及した映画では、セシル・B・デミル監督『何故妻を換える？』（一九二〇年）に黒猫が少し登場する。妻と別れて新しい

恋人と暮らし始めた主人公[8]だが、愛犬が恋人の愛猫を怖がらせてしまう。それに烈しく怒った恋人にしらけるという、犬派／猫派のギャップが生活の相性不良を示すエピソードとなる。

谷崎「青塚氏の話」（一九二六年）では、人気女優深町由良子主演『黒猫を愛する女』で、入浴中に「猫が跳び込んで来るシーン」があるとファンの男が指摘する。監督かつ夫である中田によれば飼い猫を起用したというが、男は「西洋では獣を巧く使ふが、日本の写真では珍しい」と感想を話しており、純映画劇化＝アメリカンナイズされた演出の一部に猫が含まれていたことがわかる。由良子が似ていると評された蠱惑的な女優マリー・プレヴォーは、近い時期に著された「ドリス」のP嬢とも重なる。[9]プレヴォーはマック・セネット時代にペッパーと共演した経験があり、[10]語り手が紹介した場面に近い映画が観られた可能性もある。また『キネマ旬報』一九二五年五月一一日号掲載の、白い長毛猫を抱くプレヴォーの肖像はP嬢とドリスの写真を思わせる。[11]

Pのイニシャルからはメリー・ピックフォードも想起されるが、彼女の場合、子猫とのツーショットがいくつか見られる。永遠の少女たるピックフォードと子猫、妖艶なプレヴォーとゴージャスな長毛猫というように、猫は女優イメージを代弁する。谷崎の言及もある、ジョセフ・フォン・スタンバーグ監督『間諜X27』（一九三一年）[12]におけるマレーネ・ディートリッヒ演じるスパイが〈相棒〉とした長毛の黒猫にも同様の作用が見出せよう。

谷崎が確認したかは不明だが、日本映画史に残る作品にも猫の姿が垣間見える。川端康成原案、衣笠貞之助監督『狂つた一頁』（一九二六年）では、暗い精神病棟の廊下を猫が走り去る不穏なショットが挿入される。初のオールトーキー『マダムと女房』（五所平之助、一九三一年）では、筆の進まぬ作家が鼠の足音を気にして猫の鳴き真似をすると、外の猫が呼応してしまう。注意しても通じないので空き缶を投げるというシークェンスで、猫は最後に一カット映される（缶が当たる様子はない）。『吾輩は猫である』（山本嘉次郎、一九三六年）では猫の語りは実現されず、時おり三毛猫が現れる程度だ。日本の猫映画といえばむしろ化猫映画で、一九三〇年代の鈴木澄子や戦後の入江たか子による怪演が想起される。猫騒動ものが「シュルレアリスムの克服の上に立つドキュメンタリー芸術」に発展する可能性を期待した花田清輝は、入江主演『怪猫有馬御殿』（一九五三年）に映った子猫を見て「自分をいじめた人間共を、一人、一人、食い殺してゆくエネルギー」があるとは思えず「人間が、猫のぬいぐるみでも着てあばれまわったほうが、よほど迫力がでるにちがいない」と評する（「笑い猫」一九五四年）。[13]実際の猫よりも人間のほうが〈猫性〉を表せるという皮肉である。

化猫映画の流行と同時期に『猫と庄造と二人のをんな』（豊田四郎、一九五六年）が製作された。原作のリリーは「欧洲種」の「鼈甲猫」――イギリス猫チュウがモデルとされる――だが、映画では白地の猫が起用されている。庄造を演じた森繁久彌が試写で谷崎に感想を求めたところ「よかったよ」との答えを得た。追って「私も今回は自信がありました」と話すと、谷崎は「ネコが一番、良かった」と返したという（『もう一度逢いたい』朝日新聞社、一九九七年三月）。ただし豊田によると「庄造のキャラクターは森繁さん以外には考えられませんし、これは谷崎先生もそう言つておられました」（「演出に当つて」、『Tokyo-Eiga Studio Mail』一九五六年九月一日）とのことで、谷崎なりの冗談か照れ隠しだろう。[14] いずれにせよ谷崎の視線の先にやはり猫がいたといえる。

「ドリス」に視点を戻す。語り手は、無声映画では聴くことのなかったドリスの「「にやあ」と云ふ声」を媒介として「クローズアップ」された「P嬢の紅い唇を連想」し、やはりこちらに届かない、彼女がドリスを呼ぶ肉声や発音を視覚的に捉えようとする。自らも「胴間声で」ドリスに呼びかけると「金色の瞳には、未だにもとの女主人の唇がはつきり映つてゐるかのやうに」語り手に応える。ドリスの眼は仮想的にカメラ／スクリーンとなって、女優P嬢と、はるか離れた観客としての語り手を結び着けるのである。

谷崎と猫族

実際、谷崎と猫はいかに触れ合ってきたのか。当人はボードレールの影響もあったと自己分析しており（「当世鹿もどき」一九六一年）、その嗜好と作品への昇華はすでに千葉俊二や小谷野敦らの論及があるが、[15] 改めて「ドリス」前後の状況を整理する。

日本橋育ちの谷崎は身近に猫を見る機会も多かっただろう。[16] その中で若き谷崎の目を引いたのは上野動物園で飼育されていた「シャムの猫の素晴らしいの」で、「ああいふのがあつたらほしいもんだなあ」と思っていた（「猫を飼ふまで」、『サンデー毎日』一九二七年六月一五日）。これはシャムの農事顧問である養蚕・遺伝学者の外山亀太郎が一九〇五年に寄贈したつがいで「薄鼠色で、鼻尖、尾の尖、脚の爪際等に黒色の毛がある〔……〕瞳光ハ藍色を帯て居る」一匹と「藍鼠色で、瞳光ハ金色を放ち煌々と輝いて居る」一匹だった（「動物園の消息」、『読売新聞』一九〇五年三月一一日）。[17]

実際に猫を求めたのは横浜時代で、知人のルビニー夫人（のちの宝塚音楽歌劇学校声楽教師）の家に、エリアナ・パブロヴァから譲られた「馬鹿に可愛らしい欧洲種」の子猫が五、六匹おり、一匹譲り受けたが環境に馴染まず脱走させてしまった。関東大震災を経て岡本に転居した後、縁あって「全身真つ黒」なシャムの子猫二匹を

譲り受けたものの、適切な飼い方を知らず皮膚病で死なせてしまう。「無経験から殺してしまつた」ことを反省して飼うのを自粛していたが、外国人医師から「ドイツと日本との雑種を一匹」と、「某ピアニストの夫人」から「純イギリス種を一匹」譲り受け、順調に成育することができ「ますます猫が殖え」ていった（「猫を飼ふまで」）。「雑種」はミイといい、大人しく「人格者」とあだ名されて可愛がられ、娘の鮎子とともに佐藤春夫宅へ移る運命を辿る（谷崎鮎子「老猫ミイちゃん」、『ホーム・ライフ』一九三六年四月）。

猫ドリスのモデルとなったペルシャは、大阪毎日新聞社編集総務の奥村信太郎経由で谷崎家にやってきた。奥村は、谷崎といえば猫という世間の図式に対し「実はその本家はわたくし」だと誇る。谷崎に譲ったのは、カリフォルニアの知人から取り寄せた白ペルシャのつがいから生まれた、雄の子猫一匹だった（「谷崎と猫と僕」、『サンデー毎日』一九四九年三月一三日）[18]。谷崎いわく、この猫の「双親は米国の猫児展覧会にて一等賞を贏ち得たるもの」（神代種亮「谷崎潤一郎と語るの記　下」、『読売新聞』一九二六年一月一〇日）で、奥村が由来の保証された猫を求め谷崎に贈ったことがわかる。

神代との談話では、「最も高貴なる者」と形容するペルシャ一匹、「純英国種」二匹、「日独の混血児」一匹（前掲のミイだろう）がいると話すが、同年一一月『大阪朝日新聞』の取材時には計一一匹に増え――繁殖してさらに多かった時期もあり、一部譲渡したという――記者に「蓄猫趣味」と称される。「雪のやうに真白なのや、金と黒との毛並の美しく波打つたのや、いろんなの」について、谷崎と千代夫妻が「動物園長さん」のように「これがペルシヤ」「これがイギリス」と紹介していく。谷崎はやはりペルシャが「愛翫用として」最も気に入りで「毛が長くつて雪のやうに白く、眼が銀色に光つて……性質は幾分のろまで、チヨツと亡国的なやうなところもあるが、姿態の優美で崇高なところは何といつても、猫族中の王様でせうネ」などとのろけ、「話は徹頭徹尾猫讃美論に終始」した（「猫の家」を訪ねて」一九二六年一一月二三日）。

高島屋の情報紙『百華新聞』一九二七年一月一一日号の記事「谷崎潤一郎氏と猫」も愛猫と過ごす様子をスケッチする。「書斎には相変らづ猫が数匹ニャオニャオと毛布にくるまって」おり「アメリカ種の毛並みの長い房々としたのが女王のようにいるところが面白い。［……］アメリカの女王は夜の書斎で媚態をつくす」[19]とあるのはアメリカ産白ペルシャの様子だとみられる。阪神間モダニズム・消費文化圏のなかでも「猫通」（「猫を飼ふまで」）のイメージが確立されており、「ドリス」ではそれを活用する戦略も看取できる。

一九二七年六月「猫を飼ふまで」の時点では奥村から譲られた「純白のペルシヤ猫」が二匹いると述べており、一匹増えている。

『婦人公論』一九二九年六月号の奈良ふみ子「谷崎潤一郎氏とペルシヤ猫」中の写真でその姿を確認できる【図Ⅲ】。取材に対し谷崎は、猫が「六匹ゐるよ、みなペルシヤ猫でね」と話しているが、聞き間違いか誤記だろう。奈良は「谷崎氏の、あるアブノーマルな生活を説明するやうないろんな噂話が沢山ありますが、それこそ公開を憚るものですから」と付言しており、「蓄猫趣味」と作家性に対するゴシップ的関心が表れている。

電子データのため不掲載

【図Ⅲ】　中央は娘の鮎子。

「ドリス」執筆前後で谷崎のペルシャ趣味は一貫している。一九二九年末には友人の俳優上山草人がアメリカから帰国するにあたり、ペルシャ猫を連れ帰ってもらう約束をしていた。作中でも、ドリスはロサンゼルスに住む友人A――草人がモデルだろう――が、語り手の「孤独を慰めるべく、無理にP嬢から貰ひ受けて、はるばる贈つて来てくれた」猫であり、草人在米時にも手配してもらえるよう頼んだことがあったのかもしれない。実際に草人がもたらしたのはシルバーとブルーのつがい計四匹。「アメリカでも有名な猫の子供で、ちやんとした系図」を持ち、中でもブルーの雌は「アメリカのどこやらの展覧会で賞状を貰つたもの」だった（谷崎「猫――マイペット」、『大阪毎日新聞』一九三〇年一月一二日）[20]。この猫とシルバーの雄を奥村に贈り、二人で「時々往来しては互に猫振を見くらべ」ていた（前掲、奥村「谷崎と猫と僕」）。奥村はシルバーの雌の方が美しく見えると感じ気にしていたところ、谷崎が察して譲ってくれたという。個人的な愛玩動物である以上に、由来の確かな鑑賞品として贈答し合う対象とされていた様子が窺える逸話である。

〈スタンダード〉と「猫の美容術」

「ドリス」の語り手が読みこんだ「クラシツク」の広告は、リフトアップや豊胸器具、「若返り用クリーム」、「整鼻器」等々、身体や顔貌を「理想通りの型」に近づけるための商品のもので、「ハリーウツドを功名と栄達の天国のやうに夢想してゐる」読者のコンプレックスを刺激し、購買意欲をそそる文飾が施されていた。身体美化への欲望をふまえて語り手が想起した映画『アメリカン・ヴイ

ナス』（フランク・タトル、一九二六年）はミス・アメリカコンテストを描く物語である。[21] 立候補者はマネージャーと力を合わせ、理想的な「一定の標準」に「一致する迄に四肢を鍛へる」――語り手がマネージャー業に興味を覚えるように、代わりに猫の美化を試みる展開が構想されていたのだろう。作品としては「谷崎文学のプラトニズムの系譜における「型」=「タイプ」の発見に至る過程に関連して語りだされたもの」と千葉俊二が位置づける[22]通りだが、千葉もいうように対象が猫である点に本作の特異性を見出せよう。

女優に憧れる読者が「クラシック」から啓発されたとすれば、語り手とドリスに対して同様の働きをしたのは「家庭的愛玩猫」になるだろう。一九二一年にロンドンの「猫の展覧、交換、並びに競売場」から発行されたという同書は「ドリスを養育するためにわざわざ倫敦から取り寄せた珍書で、めつたに日本にはない」。種本は John Jennings, *Domestic & Fancy Cats: A Practical Treatise on Their Varieties, Breeding, Management, and Diseases*, Bazaar, Exchange and Mart Office, London, 1921. だとみられ、初刊は一八九三年、改訂版が一九〇一年に刊行されており、一九二一年版は Christine M. Morton による増補版だと推定される。猫の種類をはじめ、飼育環境やブリーディング、給餌、手入れの方法や病気等について解説された指南書である。今東光の回想によれば、谷崎は一九二六年の上海旅行で購入したようだ。[23] 一九二一年版を確認できていないため、一八九三年・一九〇一年版[24]と谷崎訳を比べると、一部は逐語的だが省略されたり、原書にない記述も見受けられる。本稿では便宜的に谷崎の翻訳に沿って論述を進めたい。

谷崎は初めて飼ったシャム猫を亡くした際、猫の飼い方に関する書籍がなく、飼養の知識も人によって異なり当てにならなかったと嘆いていた。確かに関連書は少なく、『農業世界』一九三五年一一月増刊号「猫の文献」一覧によると、養蚕研究者の石田孫太郎が著した初の研究書『猫』（一九一〇年五月、求光閣）が挙げられるが入手が難しく、ほかは『動物学雑誌』等の学術論文が多いという。二〇年代中盤において「家庭的愛玩猫」は貴重な情報源だったろう。語り手が紹介した白ペルシャの「美観」は以下の通りだ【図Ⅳ】。

全身の毛皮が一点の曇りなき純白を保ち、房々とふくれたる状態は、その美しさ衆目の集まる所となり、真に展覧会場の花と云ふべし。そはパツチリとせる深みある青き瞳と、円き頭と、短く綺麗に切れたる耳と、大なる頭蓋と、よく発達せる鼻口部を有する短かき顔とを持たざるべからず。且又短かき身長と、健固なる四肢と、短かくして太き刷毛（即ち尾）とを持たざるべからず。体の上へ鞭の如く長く伸びたる刷毛は失敗にして、附け根がひろがり、先が大きく尖りたる耳も同様なりとす。耳

は必ず毛を以て蔽はれてあるべし、裸なるべからず、全身の毛皮と同じく純白にして、寸毫の汚点、若しくはクリーム色の縞等あるべからず。毛皮の地質は出来得る限り絹の如くにてあるべし。[25]

谷崎はペルシャの「鼻」の「線の美しさ」にこだわった。『週刊朝日』一九二九年二月二四日号の取材には「動物中で一番の縹緻好しは猫族類」だと断言し、とくに猫は「眼がいゝ、それから鼻の恰好が素的」で「豹、虎、獅子」に比べて間延びしておらず「理想的です、長からず短からず、ほどよき調和を保つて、眼と眼の間から、口もとへスーッとのびる線の美しさは何とも云へない。中でもペルシャ猫のが一等よろしい。あんなにキリッと引緊つたいゝ顔をした動物が他にあるでせうか」と答えている（「ねこ」）。

【図Ⅳ】 *Domestic & Fancy Cats,* 1901.

「家庭的愛玩猫」は、ペルシャ猫は被毛の色を問わず「大多数の愛猫家、並びに猫展覧会の訪問者に依り絶大の賞讃を博しつつ」あると説明し、白ペルシャを美しく保てば「展覧会場の花」になると保証するなど、キャット・ショーへの出品を前提として記述している。つまり映画『アメリカン・ヴイナス』における審美観と響き合うのである。種々の手入れ方法＝「猫の美容術」が記された「此の本を虎の巻にして、毎日暇に任せてはドリスを研き立ててゐる」語り手は、ショーに出場させる予定があったわけではないだろうが、ミス・コン出場者を支えるマネージャーと同様に「理想通りの型に鋳よう」とする欲望がモチベーションとなっている。

世界初のキャット・ショーは一八七一年にロンドンで開催された。イギリスは八七年に英国ナショナル・キャットクラブ、一九一〇年に育猫管理評議会を設立するなど、猫種や血統をいち早く体系的に公式化した。谷崎愛玩のペルシャはアメリカ由来だが、アメリカでは一八九九年に全米猫協会、一九〇六年に愛猫協会が設立された。[26] これらの団体により、「一定の標準」あるいは「理想通りの型」＝〈スタンダード〉が規定・管理されていく。

「家庭的愛玩猫」によると、完璧なる白ペルシャは「深みある青き瞳」を持つものながら「不幸にして殆んど常に聾なるか、或ひは耳の遠きもの」となる可能性があった。ただ「幸か不幸か、ドリスは金色の瞳を持つてゐて、聾ではなかつた」。いささか基準から外

れるために「不幸」とみる選択肢が挿し挟まれる。前掲、石田『猫』も青色の両眼を持たない白ペルシャは「価値が少ない」と説明しており、これらの基準に従えばドリスは語り手が確信する「完璧の美観」ではないのだが、「兎にも角にも、さう云ふ日本には珍らしい猫である」がために珍重する。そして「日本猫や欧洲猫のやうに敏捷でなく、いくらか魯鈍なところがあつて、亡国的に、おつとりとしてゐる」とルーツにも目配りする。ドリスは各所で遠慮なく用を足す悪癖を持つものの、それゆえにP嬢に見放されて自分の飼い猫となったのだとかいがいしく世話をし、原因を原産地にちなむ「亡国的」たる性質に帰している。

自らの飼養経験談でも「ペルシヤとドイツの混血」は「あまりたちがよくない」、ペルシャは「幾分のろまで、チヨツと亡国的」と評した（前掲「「猫の家」を訪ねて」）ように、個体よりも猫種に性質の根拠を見出していた。想像をたくましくすれば、谷崎はドリスの血統に関しても考えがあったのではないか。一九一五年に著された、美男美女を選び至上の子どもを創り出す物語「創造」を想起すれば、先天的な、遺伝的要素に理想美の根拠を見出す心理も働いただろう。

かつて谷崎が惹かれた上野動物園のシャム猫を寄贈した外山亀太郎は、同業の石田から「カイコでも猫でもと、天晴れなメンデル学者の貫禄を示す」（「虎猫平太郎」一九三六年）[27]と評されたが、遺伝の法則をふまえた人種改良法も提言した人物だった。容貌のみならず性質も操作可能であると目論む人種改良論[28]は否定すべきだが、動物のブリーディングに同類の発想があることは否めない。そもそもペルシャ猫自体が「小アジア及びペルシヤ地方に野生して居るアンゴラ猫が中世紀の頃に欧洲に輸入され」、特にイギリスにおいて「改良淘汰せられたもの」だとされる（「愛翫用種中の代表的なペルシヤ猫の種類」、『農業世界』一九三六年一〇月）。語り手が「亡国的」とエキゾチックにまなざす対象は、外部の美的基準にもとづき創造されたものなのである。

『農業世界』の同記事には、フランスにおける白ペルシャの「採点」が明記されている。いわく「頭一〇点、眼一〇点〔注―ここでは黄色や橙色も認められている〕、胴体及び形二〇点毛二五点、毛色二五点、外観一〇点、計一〇〇点」。「今日では他種との交雑の結果、純粋なものは極めて稀」で、「K婦人」なる愛猫家は「白色ペルシヤ猫は如何に注意深く飼育しても、理想的なものを得る事は出来ない」と語る。

明文化された基準を目安とする飼主は、先天的に足りない点を後天的に補うことに努める。「家庭的愛玩猫」いわく、白ペルシャが「「完璧の美観」たる」には「毛皮が一点の汚れなき純白の状態を維

持する限り」だった。正しく手入れするには、ブラシや洗浄剤といったツールが不可欠となる。また同書の「表紙の裏」に載った手入れ道具や薬品の広告は「「クラシック」の広告も三舎を避ける」ほどだといい、「今に猫の整鼻器だの、最新式睫毛美化法だのが出来るかも知れない」。語り手は冗談めかすが、理想的基準の提示とそれに近づけるための商品広告は紙上で結ばれた共犯関係にあり、「クラシック」と「家庭的愛玩猫」には同じ原理が働いている。メディア上にイメージとして、時に数値化して示された「型」に合わせるべく加工を施す行為と、それにともなう消費活動に対する批評は、愛猫の美化という形に置き換えられることで戯画として成立したといえよう。

おわりに

そもそも本作の副題によればドリスと同じ名を持つ「美女」が登場するはずだった。千葉は語り手が、現れた女性を「猫のような優美で崇高な姿態とその技巧の限りを尽くす媚態とをあわせもつ「女」に仕立てよう」としたと推測し、細江は「青塚氏の話」のように人形を作り出すか、猫と女の「分身譚」となりえた可能性を看取する[29]。あるいは人間へと化したドリスと語り手がつがう展開が見越されていたかもしれない。あらゆる手段でドリスを洗練させた先に、葛の葉や忠信狐のごとくヒトへと変化するか、ドリスが家を出て入れ替わりにドリスの面影を持つ女性――前半の文脈をふまえれば映画女優だろう――が訪れる展開があったとも推測される。狐のみならず「人魚の嘆き」（一九一七年）や「蛇性の婬」（一九二一年）に連なる異類婚姻譚の猫版、言い換えれば谷崎流の化猫譚だ。

そういった幻想を期待させつつも、美とはあくまでメディアによって、また出資元の企業・団体に促された消費行動を通して人工的に創出されるものであるとみるまなざしが「ドリス」には表れていた。ただ語り手はその構図に気づきながら、ドリスを磨き上げずにはいられないのだとも思われる。しかし彼のいかなる欲望も、人間界の経済構造も、猫にとってはやはり知った事ではないだろう。

注

① 木曜会でネオ・ロマンチシズムに関する議論をしていた際、鈴木三重吉が漱石「吾輩は猫である」とかけて言った洒落だという。吉行淳之介編『ネコ・ロマンチスム』（中公文庫、二〇二二年四月）所収。なお同書は「ドリス」も収録している。

② 細江光は広告の出典を同定し、複数冊の「クラシック」から引用されたものであることを明らかにした（「『ドリス』と“Motion Picture Classic”」、『谷崎潤一郎――深層のレトリック』和泉書院、二〇〇四年三月）。なお広告のコラージュは作者不詳とされる（佐藤淳一「解題」、『谷崎潤一郎全集 第一四巻』中央公論新社、二〇一六年一月）。

③　モダニズム小説「黒白」（一九二八年）の挿画も担当。「ドリス」では中途に終わった谷崎・中川の協働は、日高佳紀「〈狂気〉への回路――谷崎潤一郎「黒白」の読者と挿絵」（『奈良教育大学国文　研究と教育』二〇一五年三月）に詳しい。また「黒白」のころ、中川から谷崎が猫好きであることを聞いた妹尾健太郎は、自宅にいた英国種の猫二匹を谷崎に贈り親しくなったという（妹尾「猫のとりもつ縁」、『谷崎潤一郎文庫月報2』六興出版、一九七三年二月）。

④　一九二七年四月四日付嶋中雄作宛書簡によれば、三月七日に発生した北丹後地震の影響もあった。補填としてスタンダール「カストロの尼」の翻訳を渡す案もあったが、同作は『女性』一九二八年一月号から連載された（水上勉・千葉俊二編著『増補改訂版　谷崎先生の書簡――ある出版社社長への手紙を読む』中央公論新社、二〇〇八年五月）。同時期にT・ハーディ「グリーブ家のバアバラの話」翻訳も手がけており、「ドリス」での翻訳は手慣らしを兼ねたものだったと思われる。

⑤　田中貴子『猫の古典文学誌　鈴の音が聞こえる』講談社学術文庫、二〇一四年一〇月。

⑥　作家と猫の関わりについて記した文献は数多い。本稿中に挙げた書籍のほかに、『國文學　解釈と教材の研究　特集：猫の文学博物誌』（一九八二年九月）、堀江珠喜『猫の比較文学――猫と女とマゾヒスト』（ミネルヴァ書房、一九九六年四月）、田中励儀「鏡花と猫」（『幻想文学　特集：猫の妖、猫の幻』一九九八年三月）、コロナ・ブックス編集部編『作家の猫』（平凡社、二〇〇六年六月）、和田博文編『猫の文学館』Ⅰ・Ⅱ（ちくま文庫、二〇一七年六月）等を参照した。

⑦　アメリカの有志によるサイト「Cinema Cats」（https://cinemacats.com/）は映像作品に出演した猫の情報を渉猟し画像付きで紹介する。二〇一四年の開設から二〇二三年現在まで三〇〇〇以上の作品が取り上げられている。書籍では、宮尾大輔『映画はネコである――はじめてのシネマ・スタディーズ』（平凡社新書、二〇一一年四月）が、猫が出演する映画を題材として映画学的分析方法を紹介するユニークな試みを行い、『間諜X27』『猫と庄造と二人のをんな』も取りあげている。

⑧　「アズ・マリア」（一九二三年）で言及。その後主人公は、イメージチェンジして犬にも優しくなった元妻と再会し惹かれるのだが、細江はこの展開が「猫と庄造と二人のをんな」に示唆を与えた可能性を指摘する（「比較文学ノート」前掲書所収）。

⑨　前掲、細江「『ドリス』と“Motion Picture Classic”」。

⑩　Stacia Kissick Jones, “Marie Prevost Project #3: “His Hidden Purpose” (1918)”, *She Blogged By Night*. https://shebloggedbynight.com/2011/marie-prevost-project-3-his-hidden-purpose-1918/

⑪　当該画像は拙著『谷崎潤一郎と映画の存在論』（水声社、二〇二二年四月）で引用した。プレヴォーが猫に唇を寄せる別のカットもインターネット上で確認できる。

⑫　谷崎「「暁の脱走」を見る」一九五〇年二月。

⑬　東雅夫編『猫のまぼろし、猫のまどわし――東西妖猫名作選』（創元推理文庫、二〇一八年八月）所収。

⑭　松子夫人も、谷崎は森繁と山田五十鈴の好演を喜ぶとともに、「猫がよく狎れて使われていたのに感心していた」と伝える（谷崎松子「印象深い舞台と映画」、『谷崎潤一郎文庫月報9』六興出版、一九七三年一〇月）。

⑮　千葉俊二「猫の家」（『谷崎潤一郎　狐とマゾヒズム』小沢書店、一九九四年六月）、小谷野敦「「女中綺譚」と「猫犬記」」（『谷崎潤一郎伝　堂々たる人生』中公文庫、二〇一一年八月）。堀江前掲書にも詳論がある。また山本晶「猫と犬、美女と谷崎潤一郎――新書簡三通をめぐっ

て」（『三田文学』二〇一七年八月）は「ドリス」の猫贔屓やスカトロジー的傾向、「下僕姿勢」の一貫性を指摘した。

⑯ 「府下飼養の猫」（『統計学雑誌』一九〇八年九月）をもとにした真辺の計算によれば、日本橋区は人口に対し飼養戸数の割合が七・三六％で東京市内一位。

⑰ 『読売新聞』一九〇五年六月一七日号の記事「昨今の動物園」には仔が二匹産まれたとある。

⑱ 谷崎と奥村の関わりは細江光「資料紹介――谷崎活版所・点灯社をめぐる考証、その他」（『甲南国文』二〇〇五年三月）に詳しい。奥村は『文藝春秋』一九三五年八月号の随筆「わが犬、わが猫」でも、谷崎のペルシャ猫が「有名になつたのはわたくしに取つて何よりも嬉しかつた」と語った。谷崎が飼っていたペルシャ猫の名は「鈴」だというが（「当世鹿もどき」、谷崎終平「好文園から梅ヶ谷へ」、『谷崎潤一郎全集月報　一二』中公公論社、一九六七年一〇月）一九二六年から二七年にかけて増えているためどの猫を指すか特定できていない。

⑲ 松阪青渓筆とされる。明尾圭造「雅俗を遊ぶ――編集者松阪青渓とその軌跡」（小野高裕・西村美香・明尾圭造『モダニズム出版社の光芒――プラトン社の一九二〇年代』淡交社、二〇〇〇年六月）より引用。

⑳ 『大阪毎日新聞』のペット特集。柴犬談を寄せた藤井浩祐は奥村から、後述するシルバーが産んだ仔を譲られている（前掲「わが犬、わが猫」）。

㉑ 詳細は拙稿「谷崎潤一郎の映画受容（六）――ジャンルの多様化」（『同志社国文学』二〇一九年三月）を参照されたい。

㉒ 前掲、千葉「猫の家」。

㉓ 「猫と庄造と二人のをんな」執筆時、猫の描写について批評家に批判されたとしても「ちゃんと出典を明らかにしてやっつけてやる」と息まいていたという（今『毒舌文壇史』徳間書店、一九七三年六月）。

㉔ 以下のサイトで全文を閲覧できる。Sarah Hartwell, "HISTORICAL CAT BOOKS", *Messybeast Cats*. http://messybeast.com/bookshelf/jennings-domestic-or-fancy.htm http://messybeast.com/bookshelf/jennings-domesticfancy.htm　一九〇一年版は Google Books でも閲覧可能。翻訳箇所の照合は別稿を期したい。

㉕ 一八九三・一九〇一年版にはこの記述と完全に一致するパラグラフは見られなかった。

㉖ タムシン・ピッケラル、アストリッド・ハリソン『世界で一番美しい猫の図鑑』エクスナレッジ、二〇一四年六月。

㉗ 吉田和明・新田準編『だから猫は猫そのものではない』（凱風社、二〇一五年五月）所収。

㉘ 外山亀太郎（談）「思ふ儘の人を造る法」（『読売新聞』一九〇八年一月二九日）等。

㉙ 前掲、千葉「猫の家」および細江「『ドリス』と "Motion Picture Classic"」。

〔付記〕 本稿で引用した谷崎潤一郎の文章は『谷崎潤一郎全集』全二十六巻（中央公論新社、二〇一五―一七年）を底本とした。引用の際、ルビを簡略化し、漢字は新字体に改めた。省略箇所は「（……）」と表記した。「／」は実際の本文では改行されていることを示す。ウェブページの最終閲覧はいずれも二〇一三年二月四日。本稿の一部はＪＳＰＳ科研費 JP20K12930 の助成を受けたものである。